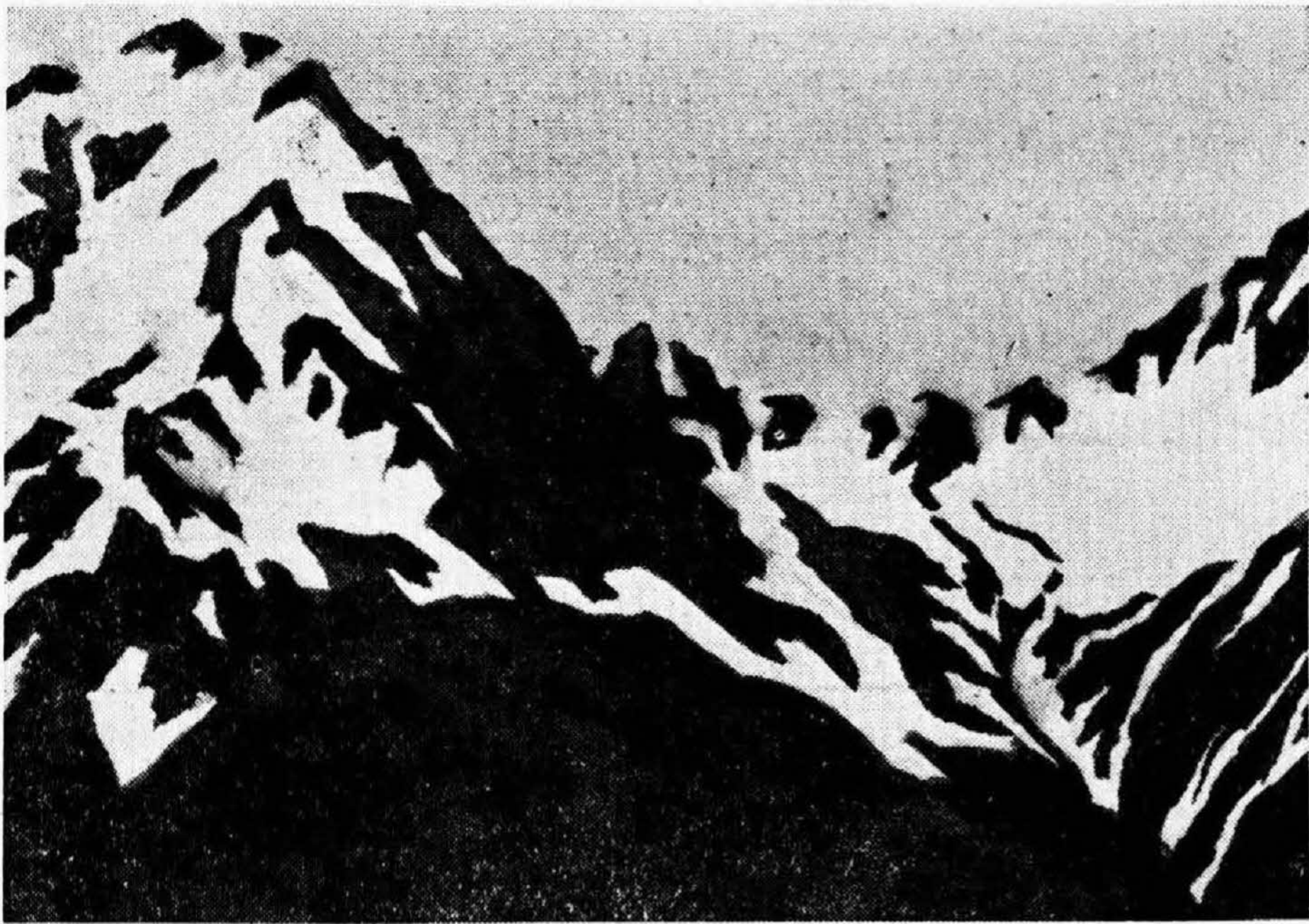


針葉樹會報

通卷第七十三號



大牟田印象記

近藤

大牟田に着いてから今日で三十三日目である。會社の偉い人は會えば必ず「落付いたかれ」と聞く。其の次は「大牟田の印象はどうだね」と来る。先ず東京人は落付かして置いて次に「大牟田を如何思つて居るか」を聞いておもむろに對策を練る考へかも知れない。

第一問答へ「大牟田なんか何年居ても落ち付きませんね」

第二問答へ「こんな汚い氣分の悪い町は日本全國中でも有數ですれ」

誰に答えるにも以上の事を云ふ事に決めて居る。それ程そんなに汚い。兎角市中はでこぼこで新築の家（是れも相當な代物である）でも一ヶ年で必ず建具の根本的修繕を必要とする。一ヶ年たてば戸、障子は絶対に動かなくなるか然らずんば鴨居からはずれて倒れるに決つて居る。道路は五間道路の中央に單線の電車が通つて居る、是が銀座通りである。一乗乗り損ふと次の電車は何時来るか分らない。こんな時は必ず歩いた方が電車に乗るより早いのである。

市中は煙で曇り（是は餘り文句も云えない。此の煙のお蔭で月給と云ふものを頂戴して居るんである）先は見えない。まるで倫敦の霧と云つた工合。道を歩いて居る人が時々正面衝突して鼻血を出して居る。是は少し書き過ぎたかな！

雨一度降れば市中は泥の海となる。全く北支の泥の海もかくやと思はれるばかりです。膝迄ある護謨靴が泥の中に吸ひとられてしまふ。會社の附近に行くとき自轉車を擔いで来る人がある。自轉車は擔ぐものであると云ふ事を大牟田に来て發見した。

會社の側到大牟田川が流れて居る。黄色や青色や赤色や色々な色に變る。此の川に沿ふて二間位の道路がある。此の道を退社時刻になると數千人の人が一時に歸る。道一杯になつて居るので川の方の奴は時々川へ零れる。

こないだも自轉車に乗つたまゝ飛込んでしまつた。とても見て居ると愉快である。

然し水面迄一間半はあるから落ちた奴は大變であるが下が泥川であるから別段痛くはないらしい。夏になるさ此の道に塵が三寸位たまつて、歩く度に塵煙が立つそうである。

市中には「松屋」と云ふ七階建のデパートがある。是が大牟田市の持つ唯一の誇りである。此のデパートが如何にインチキであるかは次號に於て詳細報告しよう。過日會社の下役が來宅して此の松屋デパート製の羊羹を持つて來た、開けて見た處半分は砂糖に還元し而も厚さ一分近くの微が全面に生長して居た。

是れには私もぞつとした。昨年秋の赤痢流行も成程と肯ける。恐ろしい處である。

病院なんてでんで藪醫である。今日も次男がすつかり目がはれて見えなくなつた。大牟田第一の眼科醫者は此の目の診察をして判斷出來ず、薬もくれない。當地ではこれ位では病院の内に入らないらしい。重れて云ふ。大牟田と云ふ處は恐ろしい處である。

これ位では未だ大牟田市の印象は盡せない。

以上は市の印象であるが餘り永くなる。會社の印象は次號に譲らう。

伯耆大山と氷ノ山

中 島

伯耆大山の山麓大山神社には旅館、宿坊があつて關西から中國九州に至るスキーヤーが皆こゝに集り正月の大山の雜然たることお話にならない。吾々もこの中の一人となつてやつと土産屋の一

室に陣取つた。翌日ツル／＼になつた大山神社の參道を登る途中で堀岡に出會した。奇遇を喜び早速その夜堀岡の宿所大山第一の不老園へ行つた。どんなにいいかと思つたらなんと廊下に寝せられたには悲觀した。

翌日吹雪の中を北壁に續く本谷を登る。北壁と云つて東向きで相當優秀なる岩場がある。この山は西側から見ると丁度富士山の様な形で伯耆富士の別名がある。

翌日も又吹雪、結局正月の四日間に三尺から四尺も積つた。本谷は絶好な雪質だ。これで歸るのは残念だが四日家事都合上已むを得ず一人で歸阪した。然るに天我に與せず五日は上天氣で而かも新雪の絶好なコンディション、堀岡と僕の伴れが頂上へ登つた。折角こんな所まで遠征して陽の目を見ず天氣の好くなつた日に歸へつたり堀岡にはばらくそこに云はれるしスキーなんか止めたくなつた。雪降坊主林君のお株を取つた形だ。さつぱりわやだ。

スキーなんかさ思つても考へて見るさ正月から毎日曜出掛けたことになつてゐる。堀岡よ安心あれ。好きな道だから已むを得ん。

大山の東南に氷の山がある。共に關西方面の所謂山スキー家連中の絶賛を受けてゐる。鳥取から但馬に出るコースとしては一番いいコースである。而もこの山は何時行つても美しい樹氷を見るこゝが出来る夢の様な山だ。去年は二日續きの休みにこゝへ來たが上天氣で實にのどかに心ゆくまでスキーを享樂したが、今年は残念乍ら吹雪でガスが甚だしく頂上に立つと前後左右上下皆是白で磁石を持つてゐなかつたら全く見當がつかない。

一行岡田、北野（會員外一ツ橋）及同弟君の四人は頂上から磁

石の示す東へ下つたが東尾根は多少北に出てゐたのでコースを間違へ一時間後やつと東尾根を發見、進んで下る。この滑行コース約三キロ、林間に粉雪を蹴つて滑る快味成程關西隨一を思はしめる。併し後が悪い。この尾根から土合に出る途中の藪入には全く泣かされた。この藪入でモソ／＼二時間もかゝつて但馬側土合に出たがこの藪の中で岡田君と北野君が川の中に四・五回も落ちてその救助作業に大騒ぎをやつたり、木にタツクルしたり平地に着いたらふら／＼になつてゐた。彼も口では仲々衰へないが山へ行くこと完全にのびてしまふ。

九州から

A R A

會社の者からスキーの映畫があると聞いては聞き流しも出來ず見に行くこと、御承知の方もあると思ふが、東日、大毎で作つた各務良幸氏作る所の雪煙といふスキー紹介兼指導映畫だつた。日本製此の種映畫では良いものと思つた。ブレイヤーの名前が出てないのも好しく、却つてブレイヤーの名前が知り度くなつた位だつた。但し二三インチキの所もあつたが、丁度酒好きが止めてゐた所へ飲んだ様なもので、此を見るさぢつとしてゐられず、紀元節のサンドウィッチを利用して再び大山へ出掛けた。思ふ様に休暇が取れる所など日頃の心掛けが良いからで、敢て自慢しても良いだらう。

大山の事は此の前に御知らせしたから別に言ふ事もないが、十一日、十二日は雪、十三日は快晴で再び頂上へ往復した。

今日は夏道を登つたが八合邊から歸る積りで同室の連中を案内

し登つたのだが目の前の頂上を見ては下りも出來ず、さう／＼晝飯なしで頂上へ引張り上げられてしまつた。時間を申上げると宿を出たのが十時半、頂上が一時半、宿へ歸つたのが二時半であつた。

今着いた日本山岳會々報に橋本と言ふ人の正月の大山便が載つてゐる。それには大山は化物でアイゼンも立たない様な所があつたり、スキーでなければ通れない様な時があつたりと報告せられてゐるが、今年のお正月に、小屋からアイゼンで歩いたとすれば自分で化物を作つてゐる様なものだ。アイゼンやピツケルを山へ持つて行くのは良いが必ず使はねばならぬと言ふ法はあるまい。又化物の出る様な天氣に登つて地元の人々に心配掛けるのも、心掛ける事柄だと思ふ。

此の日も關學(だと思ふ)の連中が五六名、物々しい姿にピツケルアイゼンで膝までもぐりながら、登つて居たのは全く堂かと思つた。僕の連れて行つた連中の中には、初めて此んな高い所に登ると言ふ全くの素人が居つたが、皆頂上迄スキーで行つて歸りを楽しんで居るのに。

又會報には二ヶ所共三針峯とあるが、此は三針峯の誤植の筈、念の爲附け加へて置きます。

二、三日前大牟田へ出張して近ちゃんので厄介になり、懐しい話を色々聞いた。部に起きた話も聞いた。忘れてゐた針葉樹會へ出てみたい氣持が又新にされた。最近の現役軍の活躍には全く敬服の外は無いが、自分以外の周圍の爲めにもアクシデントの無い事を切に望む。

休暇が今年の分、あさ九日残つてゐる。今年こそ夏の山行を決行したいと思つてゐる。誰か適當のプランを立てた人は是非御知らせ願ひ度い。今の中から御願して置きます。

近ちやんが大牟田へ來たので九州も賑かになつた。誰か三菱鑛業の連中で若松へ來るのは居らないか知らず？

編者註—本文中會報に三針峯を三針峯と誤植したとありますのは山岳會報のこと、存じ、本會報に非る旨註如斯。

關西會員スキー滑行會

出席者 森(十合)氏。岡田氏。黒田(齊藤)氏。中島氏。

二月二十七日(日) 於伊吹山。

天氣快晴、雪質絶好の好條件に恵まれてまだ眞暗な中を登る。一合目でやつと明るくなり朝食後頂上目指して登る。三合目から見ると對側の靈仙が廣い頂を眞白にして春らしく霞みその下から右側に尨大なる琵琶湖が油を流した様に靜かだ。例の「竹に生まるゝ鶯の」竹生島や對岸の眞白な比良山系が湖面に映つて日本畫そのまゝだ。

四人共しばらく茫然と眺めた後撮映競技を始めた。森氏のスキーシックス。岡田氏のスーパースミールコンタが活躍を始める。黒田氏と小生は顔負けの形でこそゝゝと寫す。結果は誰が一番優秀か三月の例會が楽しみだ。

午後八合目から六合目迄の坊主の廣い斜面で滑行の練習を始め一日中皆眞黒になつてスキーを享樂。へとくになつて三時下山歸阪車中大宴會を開いて大阪驛解散。

この日松木氏は歸京の爲、太田氏は御店の都合上、京都の五十嵐氏、宇佐美氏は腹痛の爲夫々缺席されたのは残念でしたが、又春になつたら六甲の溪流で大懇親會をやりませう。(中島記)

エヴェレストにて發見された氷斧 (二)

F・S・スマイス

扱次にはこのアクシデントが登行の時に起つたものか、或は又下降の時に起つたものかについて議論が提出せらるゝのである。若し Odell が彼等の姿を S・S の上に見たさすれば、それは下降に際して惹起せられたものである。然もそのステツプ下の尾根の困難さから見て、又ステツプ自體の驚くべき状態から見て、それはむしろ登行に際して起つたものであり、オデルは F・S 下の二個の岩塔中の何れかの上に彼等を見たのであらうと云ふ事が認められ得るのである。(註参照) 又更に F・S はおそらく尾根からダイレクトに登りきれぬものではなからうと云ふことも、この推論を一層確實なものにするであらう。この場合登攀者は尾根をばづして北面よりに登らねばならない。南面は見ゆる範圍内に於ては垂直な氷壁で常底可能性がない。今假りに二人が F・S を通過した後、下降してきたとするならば、彼等が東北尾根の稜線にそんなにも近くでトラヴァースしたとは、殊にマロリーがノルトンと Somervell によつて探られたルートを熟知してゐたことから、考へることは出来ない。ノルトンとソマーヴェルとの探つたルートは黃帶をよぎつて斜め下方に下つて來るもので、即ちかの氷斧が發見された地點よりもかなり下方を通つてゐる。エヴェ

レストに於ては、下降中のパーティーは出来るだけ早く、より低い高度に下らうとする。故にマロリーとアーヴィンが彼等の目前に黄帯を下る可き明瞭にして且早いルートが開かれてゐる時、何を好んで東北尾根の稜線上若しくはそれに近き、殆んど平行な且勞多きトラヴァースを續行してゐたかと云ふことは、殆ど想像することが出来ない。

最後の假説は次の如くである。若し彼等がノルトンやソマーヴェルの如く、東北尾根の外見上の困難さと、又 S・S の殆んど垂直な岩壁の上に約三十五封度の酸素吸入器を持ち上げる事の不可能性をよく知つてゐて、トラヴァース・ルートを選んだとしたならば、彼等も亦ノルトンやソマーヴェルの如く、下降に際してもつぎ下方のルートを探つたのであり、かの氷斧が見出された地點よりもかなり下方を通過したであらうことは、疑ひをはさむ餘地がない。(故に私はおそらく彼等が登行中にアクシデントに見舞されたものと思ふ。)

總ての登山者はマロリーとアーヴィンがエヴェレストの絶巔に到達したと想像し、又そう望むかもしれぬ。然も残された事實は彼等の登頂に反對してゐる、と云ふことを誰もが否定し得ないのである。若し實際に於て、かの氷斧がアクシデントの惹起せられた地點を明示するものならば、黄帯の基部に於る崩壊せる岩場と雪と岩石とのある山側上に、更にそれ以上の證據が見出さるゝかも知れないのである。

(註) 一九三三年五月廿日 Shipton と私は第六キャンプへ向けて登行してゐた。約二六、五〇〇呎の尾根上を登つてゐた時に、

丁度先頭にゐたシプトンがふと立止つて『S・S にウィンとウエジャーが居る』と云つて指差した。成程と思つて、二人は東北尾根がいよいよその急峻な首頭をもたげてゐる S・S の地點を凝視した。そのステップの基部に在る雪の小點綴上にはたしかに二個の點が見えた。しかもそれに視點を集注するや正しく動いてゐる様に思はれた。乍然殆んど同時にそれが二つの岩であることに氣が附いた。そのステップの上方の雪斜面にも亦二個の岩があつて、吾々がそれを凝視してゐるさ、それも亦動いてゐる様に思はれた。

以上のことは、曾つて(一九二四年)オデルが僅か數分の間に流れ行く雲霧を通してマロリーとアーヴィンの最期の姿を見たこと云ふ事實と思ひ合せて見ると、特に不思議な經驗である。殊に雲霧が、動いてゐると云ふ錯覺をえて起さしむると思はるゝ時に、彼も亦吾々の如くだまされたのであらうか? が私は彼がだまされたとは思はない。第一そう思ふには彼の叙述は餘りにも刻明すぎてゐる。その最も重要な點は、一人の人間が、もう一人の人間と一緒にならうとして登りつゝあると記してゐることである。乍然彼等二人が S・S の上に居たこと、若しくはオデルが彼等を見守つてゐた様なそんな僅かな時間内で二人がそのステップに登つたと云ふ事には、信を置くことが出来ない。そのステップは八〇呎の高さがあり而も二人は重い酸素吸入器を背負つてゐる。若しその登攀が可能せば、酸素吸入器のあるなしに關はらず、おそらく半時間以上は要するであらう。オデルが彼等を見てゐた時間は數分を出でない。彼の視界が移動する雲霧の中にあつたこととからして、おそらく二人は F・S 下の二個の顯著な突起の一

つか、若しくは F・S それ自體をトラヴァースしてゐたのであらう。エヴェレストの如き非常に錯雜せる山側に於ては、殊に霧のかゝつた日など、パーティの位置を誤認することは、蓋し容易にあり得ることである。

(F.S. Smythe: Camp Six—Appendix pp. 303—307 望月達夫譯)

(附記) 地圖かスケッチでもあるとよく解るのですが、右の文中少し説明を要する個所があるので書いて見ます。エヴェレストの絶巔 (29,002 ft) から東北に走る主稜が東北尾根 North-east Ridge といふ一七、五一〇呎の點を North east shoulder と呼ぶ。それより北微西に出た尾根が North Ridge と呼ばるゝもので所謂 North Col はこの尾根中にある。第六キヤムプ (最高) は東北肩より幾分絶頂に近く、主稜よりかなり下にある。(一九二四年の第六キヤムプはそれより更に北東下方である。) 第六キヤムプより少し上方の主稜上に二ヶの突起があり、その下のをファースト・ステップ (27,950 ft) その上のをセカンド・ステップ (28,140 ft) と呼ぶ。(標高は共にその基部の高度である。) S・S より主稜の傾斜は急峻さなる。氷斧の發見された地點は既述の如く F・S の下方である。將來のエヴェレストの可能的ルートは既述の譯文にても判ると思ふが、東北尾根の稜線を辿るものではなく、第六キヤムプからトラヴァース氣味に登り絶頂の眞北に出、大クローアールをよぎつて北面を攀じるものである。尙エヴェレストの詳細な地圖は、最近に出版せられた H. Rutledge: Everest: The Unfinished Adventure に收められてゐる二万

分の一のもの (一九三五年 M. Spender の測量によつて作製されたもの) がよい様に思ふ。尙 Himalayan Journal, vol. ix, 1937 にも之と全く同一のものが收められてゐる。

今年は又エヴェレストに遠征隊が出されるを聞いてゐる。

近日英國を去つて壯途につくであらう。今度こそ征頂を祈るさ云ひ度い處だが、まだ登られて了ふのは惜しい様な氣がないでもない。(望月記)

エヴェレストには果して

固有なる西藏名ありや

(一)

K 生

エヴェレストといふのは現在世界の最高峯として承認されてゐる大ヒマラヤ山系中の八八四〇米突の峯に與へられた名稱であるが之が長い間印度北部の測量に従事して大なる功績を残した測量官エヴェレスト大佐その人の名前である事は已に御承知の筈である。人間の名前を偉大なる世界最高の峯に附與する事の可否は別として現在エヴェレスト峯には西藏名としてチョモルンモ (Chomolungmo) が一般に用ひられてゐる。此の事につき慶應の「登高行」第十一號に本郷氏が非常に興味ある英文を引用されてゐるので私はそれを譯して御参考に供しやうと思ふ。之は Charles Bell といふ人がタイムスに寄せたものである。

主筆殿御中

「エヴェレストには果して固有なるチベット名ありや」之は私が屢々質ねられた問題であります。昨年私は西藏を五ヶ月程旅行し

て此の問題に對する探究を爲す機會を得ました。其の結果として現在私の抱いてゐるものは「エヴェレストに西藏名あるは疑ひなき事實なり」といふ結論であります。

一九二〇年、私がラサに滞在中ダライ・ラマは私に最初のエヴェレスト遠征に對する許可を與へて呉れました。同時にダライ・ラマは同山を圍る地方即ち *Lho Chamolung* (南方の鳥の國) に關する記述ある一葉の紙片を手渡して呉れました。其の後ダライ・ラマの祕書の一人が私に話して呉れたのは次の様な事柄であります。即ち紀元七世紀頃に *Song Tsen Gampo* といふ西藏の大王が同地方に鳥の聖堂を建立した。その事實は大王統治時代の尨大なる歴史書たる「十万の寶石入勳章」(?)—*The Hundred Thousand Jewelled Orders*—の中に記録されて居り、それからチヨモルン即ち鳥の國といふ名稱が由來して居るのである事が幾世紀かの間にその鳥の聖堂は忘れられて了ひ、新しい名稱が使用せられるに至りチヨモルンは前記の地域のほんの一部に限定せらるゝのみとなつた。さ慙ふいふのであります。

エヴェレスト遠征隊員中に此の山の名稱として *Chomolungma* を採用してゐる人のあるのを見ます、現地にありし此らの人々の意見は勿論大いに尊重せられなければなりません。か然し此等の人々が何の程度に西藏語を話し得るか或は各種の西藏文字を讀み得るか、私は知りません。兎もあれ私には此の名稱を受入れる事が不可能の様に思へるのでありまして、これからその理由を明らかに致します。

昨年私が西藏を旅行してゐる際、エヴェレストへ行つた事のあ

る多くの人々に遇ひました。その中の數人はエヴェレストの直ぐ近くに住んでゐた人々であります。此の中に現在 *Chamolung* として知れてゐる地方からは僅かに一日行程の所に家を持つてゐるパーリの地方官 (*Dzongpen of Phari*) が居りました。彼はエヴェレストを *Kang Chamolung* 即ち「鳥の國の雪」と呼んで居りました。此の名稱は、八百年以前殆ど裸體で氷の山の洞に住んでゐた所の西藏の詩聖を祀つた土地である *Lapchi* に禮拜の爲めにやつて來、エヴェレストの近くを通り過ぎた *Chumbi* 溪の尊敬すべきラマ僧によつて獨立して與へられたものであります。此の名稱は同じく附近の地方の地方官によつても與へられてゐます。私の西藏旅行に扈征した使用人チャンバはエヴェレストから馬で一日以内の所に住んで居ました。彼も此の名稱を使用してゐました。彼の従弟は二十一年間ロンブーク僧院のラマ頭の侍者でありました。此の僧院はエヴェレストに近くその全容を見得る位置にあります。チャンバが云ふにはそのラマ僧も侍者も同じ名稱を使用してゐたこの事でありまして。チャンバも尙附加へて居りましたが、私も亦その名稱を知つてゐる他の人との會話の中でそれ等の人々が *Kang* を略して單に *Chamolung* のみ云つてゐるのを屢々耳にしました。然し一番正しうのは *Kang Chamolung* 或は *Chamolung Kang* 又は *Chamolung Kangri*—*Kangri* は「雪の山」の意—であることその人々が云つて居りました。最初の形が最も普通であります。 *Kang Rimpoché*—貴重な雪の意—も同じ例でありまして此の山は西藏中で最も神聖な山で印度人及他の國々の人には *Kailas* として知れてゐるものであります。第二の形と同じも

のにはラプチ地方の雪の山といふ意味の Lapchi Kang があります。私か話し合つた他の多くの人々はエヴェレストに對して此等の名稱を與へてゐたのであります。(以下次號)

記 録

○奥手稻・奥無意根

林 俊 介

三月十九日夜行函館發

同二〇日(快晴) 錢函(八・〇〇)―奥手稻山頂(二二・〇〇)―奥

手稻山小舎(〇・二〇)―一・三〇)―錢函(三・二〇)―札幌(泊)

同二一日(快晴) 札幌(七・四〇)―定山溪(八・三〇)―鳥居(九・

五〇)―一・〇〇)―奥無意根小舎(一・三〇)―二・三〇)―定山溪

(四・〇〇)―四・〇八)―札幌―小樽

同二二日早朝歸函。

今尙積雪三米。羨むべし。

○野澤春スキー(三月二〇―二一日) 中川孫一、増山清太郎

二日共快晴、雪は多少べたついたが、野澤の名所を滑りつくし

て充分春スキーを満喫した。

消 息

吉澤一郎君 大森區堤方町六一五番地へ轉居。

太田又一君 大阪市住吉區北田邊町七八六番地へ轉居。

林 俊介君 函館市本町一番地 山村信三方へ轉居。

新入會員

(勤務先及住所)

小谷部全助君 住友鑛業株式會社總務部購買課

(大阪市東區備後町三丁目一九 洲崎方)

小林重吉君 三菱鑛業株式會社直方鑛業所

(福岡縣直方市御館山 三菱鑛業所多賀寮内)

森脇芳之君 三井物產株式會社船舶部(神戸)

(神戸市灘區五毛二の一 篠原敏夫方)

和田榮達君 橫濱正金銀行神戸支店

(神戸市灘區德井字弓ノ本、二四 佐伯方)

望月達夫君 三井信託株式會社證券部 (住所從來通り)

定例集會 三月二十九日(火) 於如水會館

出席者(會員) 中川、吉澤、村尾、吉澤松、關、増山、鈴木、

小柳、柿原、新羅(新入會員) 小谷部、小林、和田、望月、

(部員) 鷲崎、佐々木、岩崎、原、宮城

新入會員の歡迎會と其の中四人の者の地方行きの送別會とを兼

ねて行つたのであるが、時節柄晚餐會等は中止して、ビールで

乾杯をやつた。此の晩小谷部君が大阪へ立つので、殆んど出席

者全部で見送る。

編輯後記

今年山岳部を巢立つた五名の會員一年生の中、四人の優秀なるメンバーは脱兎の如くうるさい東京から逃げてしまひ、結局小生が東京にのこることとなり、それ迄は良かったのですが、會報の編輯を命ぜられることになつたらしいです。實は來月號からやる豫定でしたが、丁度柿原君が風邪をひいた爲急に校正刷がまひこんできたのです。ですから編輯者も同君の名をか、けてをきました。此の次から原稿は望月宛御送り下さい。尙山岳部の春山報告は頁數の都合で次號に掲載いたします。(望月記)